

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

アメリカ文化とサイキック・ナミング：
カリフォルニアの一都市からの考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1996-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/764

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



アメリカ文化とサイキック・ナミング

—カリフォルニアの一都市からの考察—

崎 谷 若 菜

はじめに

ある特定の文化を調べるには、その文化に特有の宗教、芸術、哲学、社会制度などを大局的に研究するマクロ的接近法と、具体的な事例を調査して、その文化の特徴を見つけるミクロ的接近法とがあります。前者はその文化の全体像を捕らえるのに適していますが、そのなかの人間の生きた姿が見えにくい欠点があり、後者にはその文化を総合的には把握しにくい面がありますが、文化とは要するに日常生活の積み重ねであることを考えれば、この方法を無視することはできないと思います。この小論は主としてミクロ的接近法をとり、アメリカ文化の全体像を視点に据えながら、カリフォルニア州の都市モデストに1994年12月と96年8月の2回にわたって滞在した経験に基づいた報告書です。この一地方での滞在の間にもアメリカ文化のよい面だけでなく、それが抱える矛盾の深淵も垣間見られました。

文化とはなにか

議論を進めるため、まず文化とはなにかを明確にしておかねばなりません。この小論で文化というのは、「文化人」「文化活動」などといったときの「文化」が意味する個人の精神面の充足のことではありません。人間が学習によって社会から習得したもののすべてです。それは衣食住を初め、技術、学問、芸術、道徳、宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容を含みます。アメリカ文化とは従ってアメリカ人がつくりあげたものの総体です。それはイギリス人移民が持ち込んだアングロ・サクソン文化に始まって、主として白人が築いたものです。言い換えれば、ユダヤ・キリスト教文化です。ユダヤ人とキリスト教徒はしばしば激しく対立してきましたが、ともに旧約聖書をもち、ユダヤ・キリスト教倫理を共有していますので、ここではユダヤ・キリスト教文化と呼びます。しかし白人移民の前にはアメリカ先住民が住んでおり、その後は黒人やアジア人も移民してきましたので、アメリカ文化は複雑で、大きな複合体です。

ある文化に属する人たちにはその文化に特有の共通の考え方があります。トーマス・クーン

はこれを「パラダイム」と呼びました。アメリカの科学史家のクーンは、「自然科学は新しい事実の発見が増えるにしたがって次第に真実に近づいていくというのではなく、あるとき突然、科学者の考え方、つまりパラダイムが変わる」と主張しています。パラダイムとは、ある時代の科学者がもっている共通の考え方です⁽¹⁾。文化についても同じことが言えます。オーストリアの哲学者カール・ポパーはこれを「文化的枠組み」と呼びました。故井筒俊彦は、「文化的枠組み」はその文化に属する人びとに考え方やものの見方を、ある一定の範囲内に押し込める規制力のある、内部構造をもった閉ざされた構造で、それは究極的には「その共同体のもつ自然言語の意味論的、文法学的な構造に基礎づけられている」と、述べています⁽²⁾。この「文化的枠組み」はある文化を統一する原理であるとともに、異なる文化を存在させる多様性の原理でもあります。

そこで問題になるのが言語や文法です。例えば日本語の「赤」、英語の「RED」がまったく同じ意味なら、単に書き方が違うだけです。文法が違っていても、「赤は止まれ信号である」といっても「赤ある止まれ信号」といっても、推論は同じです。もし普遍的な言語があるとなれば、そこには異なる文化が存在する余地はありません。スイスの言語学者フェルジナン・ド・ソシュールは、「神の言葉（ロゴス）のような普遍的な言語は存在せず、人間が長い歴史のなかで築き、意思を伝え合ってきたラング（言語）は恣意的な体系である」と述べています⁽³⁾。人が交通信号を見て、言葉の倉庫ともいえるラングのなかから「赤」を選び、「止まれ」という意味であると考えます。ソシュールは前者を指示するものという意味でシニフィアン、後者をそれと結びつく対象としてシニフィエと名づけました。この二つは分けることのできない言語記号、シーニュを構成します。シニフィアンだけが、あるいはシニフィエだけが独り歩きすることはできません。このシーニュに含まれる「赤」と「止まれ」は、他のもの、例えば「赤」は「進め」でもよいわけです。これが言語の恣意性です。

一例をあげましょう。フランスではこの国が築いたもの、フランスの宗教、学問、芸術からパリの下水道などに至るまで、それをフランス文明と呼び、フランス文化とは決して言いません。これに対して近代化に遅れをとったドイツは、フランス文明というのは物質面の優位にすぎず、ドイツは精神面で優れているとして、文化（Kultur）を強調しました。従って、ドイツで「文化」というときには誇りを込めています。フランスで「文化」というときには、文明に遅れをとったドイツ人といった軽蔑のニュアンスがあります。しかし日本では「文化」にこのような意味はありません。文化とか文明というシーニュは、まったく恣意的に選ばれているのです。こうしたことが意味しているのが、シーニュの集まりであるラングの恣意的体系です。

このラングの恣意性は、ある文化が普遍的な言語、例えば神の言葉を知っていると主張して、優位に立つことを許しません。具体的にいえば、白人文化あるいはヨーロッパ文化が中心にあつて、その他の文化が周辺に位置すると主張することはできません。

このようにして、世界にはさまざまな異なる文化が併存します。二つの異なる文化が接触す

るとき、そこに大きなエネルギーが発生することがあります。日本は明治維新のとき、文明開化といって西洋文化を取り入れました。それまでの日本的な文化、つまり固有の文化と西洋の文化が接触し、日本人の大きなエネルギーが噴出しました。

しかし、異なる文化が接触するとき、そこに危険な衝突が生まれることもあります。例えば、中東ではユダヤ人とパレスチナ人がお互いの文化を否定して、長年にわたって紛争を続けてきたことは周知の通りです。1993年の秋、イスラエルとPLOが相互の存在権を認めて、和平に向かって一歩前進しましたが、イスラエルのネタニヤフ政権の誕生で、見通しはむしろかしくなってきました。しかし、このような場合、和平を達成するため取り得るただ一つの道は、お互いの文化の違いを認めて、そこに「共通の価値」を発見することです。

このように異文化間の共通の価値を探る動きが、特に冷戦終結後高まっています。一例をあげれば、政府開発援助（ODA）や非政府組織（NGO）の援助は単なる先進国の途上国への「恵み」ではなく、「人類共通の資源」であるという認識が芽生えています。

サイキック・ナミングとはなにか

この小論を進めるための一つの重要な概念はサイキック・ナミング（psychic numbing）です。ナミングとは寒さで手がかじかんで感覚が麻痺するような状態です。従って、サイキック・ナミングとは、なにか困難に出会って精神がかじかんでしまうことです。精神的無感覚症と翻訳することができます。

この言葉はアメリカの精神医学者のロバート・J・リフトン（イエール大学教授を経て今はニューヨーク市立大学教授）の造語です。

リフトンは1952年に初めて来日し、それ以来2世代にわたる日本人を見てきました。日本人の深層心理に詳しく、大江健三郎ら多くの日本人と親交を交わしています。リフトンの研究方法の特徴は、極限状態を共通に体験した多くの人に面接して、その心理を実証的に追求することです。原爆を経験したヒロシマの被爆者の研究⁽⁴⁾、中国の思想改造（洗脳）で拷問を受け、帝国主義は悪であると無理にたたき込まれ、後遺症に悩む体験者の心理研究⁽⁵⁾、社会にうまく適応できなくなったベトナム戦争帰還兵の研究⁽⁶⁾などがよく知られています。

リフトンはこうした実証研究にもとづいて、極限状態を体験した人たちの心理を一般化して“The Broken Connection”という著作を発表しました⁽⁷⁾。

リフトンはそのなかで極限状態を共有した人たちに「外傷的症候群」（traumatic syndrome）が見られると述べています。それは、フロイトが発見したイド（本能的自我）の抑圧による神経症ではない、とリフトンは指摘しています。

この外傷的症候群には、次の5つの特徴的な性格をもっていると言います。

1) death imprint 2) death guilt 3) psychic numbing 4) conflict around nurturing and contagion 5) struggles with meaning or formation です。

1) の death imprint (死の刷り込み) というのは戦争や災害などの経験によって生命の脅威や終焉といったイメージが心に急激に侵入してくることで、リフトンはバファロークリーク事件 (1972年、ウエスト・バージニア州で起こった人災による洪水災害) での体験者の面接で得た知識として、2) の death guilt (死についての罪の意識) について具体的に述べています。この災害の体験者は「なぜ私は生き残り、彼は死んだのか」「なぜ私は生き残り、他を死ぬにまかせたのか」「私は彼女を殺してしまったのだ」という罪の意識に悩んだといひます。3) の psychic numbing は先に述べた通りです。

4) は少し説明を必要とします。nurturing は心に滋養物を摂取して立ち直ろうとする努力、contagion は接触感染という意味で、経験した極限状態を思い出させるものに接して感染し、崩れおちることです。conflict around nurturing and contagion とは、この両者の間の葛藤のことです。5) は生きる意味つまり自己形成のための努力です。

サイキック・ナミングとその周辺にあるいくつかの概念を説明しましたが、最近ではサイキック・ナミングを、必ずしも極限状態を体験した人のひとつの精神症状という狭い意味だけに使っているわけではありません。私たちは、近代化という大きな波に襲われており、少なくとも先進国では生活は豊かになってきましたが、なにかある面では人びとはサイキック・ナミング、つまり精神的無感覚症に陥っているのかもしれない。

こんなことを考えながら、アメリカ・カリフォルニア州・モデストのストロンバーグ夫妻、マグナスとジョアンの家で2回滞在して、アメリカ文化を観察しました。

2年ぶりの再会

夫妻は私の家に滞在したことがあったので、1994年12月に会ったのは2年ぶりでした。モデストに着いたとき、すぐ会話が始まりました。「ジサボケはどう？」とマグナスは聞きました。「時差ぼけ」を英語の jet lag ではなく、jisa-boke と日本語を使いました。実はこのモデストと近隣の田舎町ニューマンのかんりの家族が日本の大学生をホームステイさせており、彼は最近の日本の事情にも関心をもっていました。日本で社会問題になっている小中学校でのいじめについて、「小学生の自殺は本当にあるのか」などと、心痛の思いで質問してきました。

「アメリカでも学校でのいじめがないわけではありません」と、小学生の子供をもつ母親は話しました。アメリカでは両親の離婚で残された子供たちがいじめを誘発するケースがあると言ひます。わたしはいじめをする子供たちの心に潜む驚くべき無感覚、サイキック・ナミングを感じました。いじめをする子供はたいてい愛情に飢えたり、成績が振るわなかったり、欲求不満に陥っています。このような悩みは純真であるべき子供たちの心に、まるで大人が極限状態を体験したのに似た衝撃を与え、「外傷的症候群」を引き起こします。そのひとつの現れがサイキック・ナミングです。モデストの教育関係者は、「こうした子供たちの感覚を蘇らせるには、ボランティア活動に興味をもたせたり、スポーツや音楽、絵など子供が熱中できるもの

を学校で訓練することだ」と話してくれました。

いじめは今や先進国共通の問題になっています。文部省などの主催による「いじめ問題」国際シンポジウム（1996年6月、東京と大阪で開催）で森田洋司・大阪市立大学教授は、「受験ストレス、管理主義的教育、閉鎖的な島国根性など、この国の風土と結び付けて、いじめは『日本に特殊な問題』という思い込みがあった。しかし、シンポジウムで報告された海外の状況を聞くと、日本との違いより、むしろ驚くほど類似している点が多かった。日本で陰湿ないじめの手口と言われていた『集団無視』や『仲間外し』も報告された」と述べました⁽⁶⁾。

マグナスは小柄で、物静かな好人物です。一方、ジョアンは整った顔立ちで、背はそれほど高くはないが、ふくよかで、立派な体格をしています。「ここがあなたの住まいよ。クリスマス・ディナーのため、4キロもあるターキーを買ってあるわ。クリスマスの翌日はビッグ・セールで、すべての日常品は半額になるから、一緒にショッピングを楽しみましょう」と、大きな声で、相変わらず陽気に話していました。

ここでマグナスの生い立ちに簡単に触れましょう。「彼は1924年にフィンランドの寒村で生れた。父は3回結婚して、9人の息子と4人の娘を設けた。彼は2番目の妻の子。祖父と祖母はモルモン教がフィンランドに布教を始めたころに信者になり、母も信者。彼は1941年にモルモン教徒になった。当時は第二次大戦中で、フィンランドはソ連と戦っていた。同年、戦禍をさけるためモルモン教徒の招待でスウェーデンに渡る。彼は小学教育しか受けなかったが、電気に興味をもち、スウェーデンで電力会社の配線工として生活する。兄弟の1人から聞いていた「大国」にあこがれ、戦後の1951年にアメリカに移住する。モルモン教総本部のあるユタ州のソルトレーク・シティーへ行き、やっとのことで小さな会社の電気技師の職を見つける。そしてこの地でジョアンと知り合う。モンタナ州・ディロンで結婚生活を始める。最初はバスルームも共同のような小さなアパートでの生活であった。その後、マグナスはIBMに職を得て、生活は安定する。1987年に引退するまで31年間IBMで働く。4人の子供、15人の孫、1人の曾孫を得て、モデストで暮らす。」（マグナス回顧録から要約）

マグナスの死去

それから1年半たった1996年8月、わたしは再び渡米しました。サンフランシスコから迎える車でモデストに向かいました。マグナスがその1年前に亡くなったのでジョアンはさぞ気落ちしているだろうと思っていましたが、わたしに会うなり、「ビッグ・ニュースがあるのよ」と、相変わらず元気でした。孫の一人が「狭き門」を通して、ニューヨーク・ブロードウェイのミュージカルに出演しているのが、ジョアンにはよほど嬉しかったに違いありません。それでも会話がとぎれたときなど、そっと涙をぬぐう時もありました。「劇場へ行きほかの夫婦を見たりすると、たまらなく寂しいのよ」と語りました。

マグナスが亡くなるとすぐ葬儀屋が来て、遺体を教会へ運び、葬儀を行い、埋葬しました。

「わたしの知るかぎり、モデストで火葬が行われたことはありません。地中に埋葬します」と、ジョアンは語りました。

そこで、わたしは早速ジョアンとともに墓参りに行きました。墓地は車で15分ほどのところにあり、一面が芝生で覆われ、公園のようでした。機械で芝を刈るため、墓碑を立てることは許されず、地面にあるプレートには「MAGNUS STRONGBERG 1924—1995 ; JOANNE 1931—」とありました。「墓は基本的には夫婦だけが入ります」と、ジョアンは説明してくれました。日本でよく見る「先祖代々の墓」ではありません。

ストロンバーグ夫妻が信じるモルモン教では、会堂 (temple) で正式に行われた結婚は死をもって終わらず、永続するとされています。結ばれた二人の魂は死後も存在し続けるので、墓は夫婦だけが入るのです。しかし、この墓地はモルモン教徒だけのものではないので、ジョアンの言ったことは、少なくともモデストでは普通のことでしょう。しかし、これだけでアメリカ全体の埋葬様式とその宗教観を知ることができないのは当然です。

「入院していたマグナスは最後の時は自宅で過ごしたいと希望し、病院も心よくそれを認めてくれたの」と、ジョアンは語りました。「病院から毎日看護婦が来て、実によくやってくれたわ。延命措置はしたくないという本人の希望で、苦しみを取り除くための痛み止めをただけよ。3か月自宅にいて、家族に見取られて息を引き取ったの。夢を求めてアメリカに移民し、IBMという一流会社に職を得て、子孫にも恵まれ、幸せな人生を送ることができたとマグナスは確信していることでしょう」。

モデストは住民が協力し合うという西部開拓時代の精神を残した都市です。ジョアンは週に2日、ボランティアとして亡夫が世話になった病院へ働きに行っています。また、マグナスが病気だと知ってから、彼の家事分担であったごみ処理を、親しくしている隣の家の息子が自発的にやってくれている、と言います。

「マグナスが亡くなってから最初の感謝祭のとき家族が集まって墓参りをしましたが、アメリカでは墓参りに親戚一同が集まるという習慣はないと思います」と、ジョアンは語りました。クリスチャンには一周忌とか三回忌といった仏教の法事がないので、ある決まった日に家族が集まって墓参りする習慣はありません。親戚が遠くから、近くから集まるのは感謝祭とクリスマスのときです。

「人は死んでも魂は残ります。その魂は識別できるのです。例えば、わたしの魂とか、ジョアンの魂とか」と、マグナスが語っていたのが耳に残っています。

不滅の象徴化について

「2週間以内に必ず崩壊することを知っている家に住んでいたら、その不安でわたしのすべての生命機能は傷つくであろう。しかしその逆に安全だと感じたら、わたしはその家に住んで正常で快適な生活を送れるであろう」と、スイスの心理学者カール・ユングは語りました⁽⁹⁾。

人間はだれも不滅 (immortal) ではありません。ある意味では、すべての人は必ず崩壊する家に住んでいるようなものです。しかし、死は暗黒の淵に落ちるだけで、すべてが無に帰することだと考えたら、人は正常に生きることはできません。先に述べた極限状態を体験した人に見られる「外傷的症候群」は、このような暗黒の淵を覗き込んでしまった人に現れる症候群です。このため、いきいきとした精神活動ができなくなってしまったのです。

人はだれも心のなかに、あるイメージを抱いて生きています。リフトンは、個人も集団も象徴化された不滅というイメージを大切に生きており、このイメージが失われたとき人は社会に適応できなくなり、と主張しています。

リフトンは不滅を象徴化する次の5つの態様 (mode) があると分析しています⁽¹⁰⁾。

1) 生物学的態様 (biological mode) これは要約すれば家族の連続性ということで、心理的にいえば子供や孫へと生物的に無限につながる鎖というイメージが人の心のなかに入り込むことです。

2) 神学的態様 (theological mode) 宗教的態様と言ってもよいでしょう。精神的な成就を通して死を超越する意識で、来世とか靈魂の不滅といった概念のあるなしに関係なく、多くの場合、生まれ変わることを信じます。

3) 創造的態様 (creative mode) 偉大な芸術作品、文学、科学上の成果、あるいは身近な人たちへの慎ましやかな影響という形で表現されます。「芸術は死を免れる」という形で端的に示されます。

4) 自然的態様 (natural mode) 私たちを取り巻く自然環境が空間的にも時間的にも無限であるという認識が続くことです。フロンによるオゾンホール拡大、熱帯雨林の減少、砂漠化、大気や河川の汚染のような環境の破壊、あるいはエネルギー、天然資源、食料などの枯渇の恐れは、この自然的態様を脅かしています。

5) 経験的超越の態様 (experiential transcendence mode) これは「経験的に超越すること」とも呼ぶべき状態で、これまでの態様とは異なっています。この態様では人は高度の緊張状態にあるため、時間と死が消滅してしまいます。シャーマニズムのような古典的神秘体験、きびしい修行、性愛などのほか、幻覚剤の使用によるエクスタシーもこれに含まれます。

日本でもこうした神秘体験を求める若者がいますが、近代的合理主義がもたらした不安や過酷な競争に耐えられなくなった焦燥から逃れたいというのが、その心理的背景にあるのでしょうか。しかし、この「経験的超越の態様」は悪用される恐れがあります。また、アメリカでは麻薬の蔓延が大きな問題になっています。手っ取り早く現実から逃避しようとするのでしようが、その背後には麻薬の密売組織があります。

「人間は死んでも魂は残ります」とマグナスは言いました。これは不滅の象徴化を神学的態様に求めたものです。

ヒンズー教にも死後の魂という思想があります。魂は輪廻を繰り返し、前世、現世、来世と無限に続きます。動物に生れ変わることもありますから、個人の識別された魂ではありません。

ん。輪廻は苦であり、それから脱することを解脱といい、ヴェーダ哲学は解脱への道を説いています。なお不可触民にはこの解脱は認められていません。蘇生の思想は旧約聖書にすでに現れており、「殺すも生かすも、陰府^{よみ}に下すのもそこから引き上げるのもヤーウェである」(サムエル記2, 申命記32)とあります。ユダヤ・キリスト教では、生命あるいは精神は神が与えたものだから、前世は認めません。「お前の不幸は前世のたたりだ」などという脅しは効きません。新約聖書のヨハネ黙示録は死者の復活を描いています。それを要約すれば次のようになります——。「死も陰府もそのなかにいる死者を吐きだし」、善人も悪人も審判者の前に出頭させられる。そして悪人は「第二の死」に投げ込まれ、選ばれた者は、最初の楽園と天上のエルサレムを同時に意味する変容した世界のなかで新しい命にはいる。

モデストの都市構造

モデストはサンフランシスコの東150キロにあるカリフォルニア州中部の広大な台地のなかの都市。1806年に伝道の地として探検されたのが始まりで、1870年にその基礎が定められ、84年に市制が敷かれました。農業、畜産、酪農、ワイン醸造、缶詰工業などで発展したが、人口は1960年でも3万6千人余りに過ぎませんでした。

モデストの地価はサンフランシスコの住宅地の3分1程度、物価も安いので、近頃はサンフランシスコのベイエリアに車で通勤する勤め人が住むようになって、人口も約20万人になり、アメリカの標準規模の都市になりました。

モデストの高等教育施設としては2年制のジュニア・カレッジが1校あるだけです。しかしここで上の成績を取れば、だれでもスタンフォード大学やカリフォルニア大学バークレー校に転入できるそうです。

ジョアンの住む一帯は閑静なところ、住宅はほとんど平屋建てで、自然が無限に広がっているようです。この辺は住宅専用地域でショッピング・センター、レストラン、劇場などは車で20分くらいのところにあります。典型的なアメリカの住宅地のように、ちょっとした買い物をする商店は近くにはありません。日本では町中に商店や食堂、喫茶店、ゲーム・センター、自動販売機などがあり、昼も夜も人が歩いています。そんな町を見なれたわたしの目には、この町は少し異様に感じました。モデストのこの辺は、治安の心配もあってか、夜はもちろん、昼間も人通りはほとんどありません。

わたしはここでローマやマドリッドの都市を思い出しました。両都市とも人口が300万前後で、東京(23区だけで約800万)に比べて規模が小さく、職住接近です。イタリアやスペインは日本ほど中央集権が強くなく、首都に政治、経済、文化などの機能を過度に集中させ、住宅地を遠方に押しやってはいません。しかし午睡するシエスタ制度も見逃せないと思います。昼過ぎに自宅に帰ってたっぷり時間をとり、ワインを飲み、その日の一番のご馳走を食べます。だから遠いところに住むことはできません。生活を楽しむラテン系の人たちの知恵が、職住接

近の都市を造りあげる一因になったのです。ですから人の住むところに商店、レストラン、劇場などがあります。職住接近の混在都市でもあります。

ローマでは、シエスタが終わる夕方になれば、有名なブティックが並ぶスペイン広場前のコンドッティ通りは、観光客だけでなく、地元の人たちも混じって、ウィンドウ・ショッピングやデートの人の波です。マドリッドでも事情は似ています。中心部にある大広場プラサ・マジョールは散歩し、生活を楽しむ人が絶えません。盛り場は夜でも歩いて安全なのです。マドリッドで最も危険な時間帯は、シエスタで人影もまばらな昼下がりの時間であるといえます。

イタリアやスペインでは、アメリカの地方都市モデストに相当するような、首都から離れた小都市でも事情はローマやマドリッドに似ています。人の住んでいるところの近くで買い物ができます。スペインではどの町に行ってもこの国独特のバルがたくさんあります。バル(bar)は日本のバー(英語の綴りはbarで同じですが)とは違って、朝から夜遅くまで開き、飲み物や軽食をサービスしています。バルは庶民が長時間のおしゃべりを楽しむ、憩いの場でもあります。こうしたことから街には人通りも多く、どこことなく活気があります。

最近ではスペインの大都市では、シエスタの時間でも店を閉じないスーパーマーケットが進出してきて人気を呼んでいます。スペインはかつてイスラム文化のアラブに支配されていたので、アラブ風バザール方式のメルカード(市場)も衰えてはいません。人びとはメルカードで店の人とお喋りし、品定めしながら買い物を楽しんでいます。

これに対してアメリカは合理主義です。流通は徹底的に合理化され、スーパーマーケットなど巨大な流通機構が発達しました。これは物価を引き下げる役割を果たしましたが、多くの地方都市から街中の小店舗を駆逐してしまいました。車で行くショッピング・センターと住居地区の分離です。このため、モデストのような歩く人影のまばらな町が出来あがったのです。

わたしはフロリダ州のボカトンに滞在したことがあります。住居群は密集した樹木の壁に囲まれ、そのなかにはプールとたまにしかプレーしないゴルフ・コースはあるものの、商店は一軒もありません。この町は日本人の設計によるものですが、初めから買い物は車でショッピング・モールへという思想で町が造られています。

家族について

モデストでは多くの家のファミリールーム(居間)に家族の写真をかけています。ジョアンはそうした写真を説明してくれました。「これがわたしの父と母よ」「これが長男の一家の写真」。夫婦と娘2人の幸せそうな家族の写真を見ていたジョアンの顔が急に悲しそうになりました。「息子は離婚して、今は一人で住んでいるの。彼はとても真面目で、優しいのよ。妻も子供たちも愛していたわ。家族に経済面でも苦労はさせなかったのよ。それなのにある日いきなり、なにも言わずに妻は出ていったの。彼女はそのあと弁護士を通して子供たちを引き取っていったわ。だから息子が娘たちと一緒に過ごすのは休暇のときだけ。かわいそうなわたしの

息子！ なにも悪くないのに。今でも彼は子供たちを愛しているのよ」。元気を取り戻したジョアンは写真の説明を続けます。「これは長女の写真。彼女は35歳で2人の娘と3人の息子がいるのよ」。「この写真は……この美しい婦人は父の妻なの」。母が先に亡くなったのだと思っていると、「彼らは離婚して、父が再婚したのよ」。なぜ母親と離婚して、再婚した父の相手の写真が娘の居間に飾ってあるのか。わたしが理解に苦しんでいるうちに、ジョアンの写真説明は終わりました。

アメリカでは家族を血縁集団と見るより、共同生活する小さな集団と見る傾向が強く、この写真は、血のつながりはなくても、父が共同生活した家族を大事にしたいとの気持ちの表れなのでしょう。

これは心理的に見れば、アメリカでは不滅の象徴化で述べた「生物学的態様」がそう強くはないということです。これに対して強い血縁意識をもっているのは中国の文化です。「子なきは最大の不孝」と孟子が語ったのは、この「生物学的態様」がいかに強いかを示しています。中国の伝統的な父系血縁制の基本は、個人は生まれるとともに父の属する血縁集団（宗族）の成員権を獲得し、それは普通は死ぬまで変わらないということです。女性は結婚すれば、夫側の家族に一員になりますが、宗族が変わらないので、姓は変えません。同宗（同姓と同宗とは必ずしも一致はしません）間の結婚は禁止され、同姓不婚と言われていましたが、中国共産党が政権をとってからの婚姻法では同姓不婚は禁止されてはいません。この父系血縁制で注目されるのは、父・息子の関係と兄弟関係は重要性において同じ比重をもつことで、兄弟は均等の財産相続権と、生家に居住する平等の権利をもつこと、男は外を治め、女は内を治めるという分業ですが、男女は対等の立場に立つ、などです。中国の社会はこのような父系血縁制を軸に発展し、そのなかで先祖崇拜や長幼の序などの儒教倫理が確立しました⁽¹¹⁾。

アメリカでは血のつながった子供のことを余り考えずに簡単に離婚しますが、日本では子供のため離婚を思いとどまるケースが多く、日本はアメリカに比べれば血縁意識が強いように見えますが、一般的に言って、日本人の血縁意識はそれほど強くはありません。日本人の姓に、森や林など自然の名前が多いのは血縁意識が強くない表れでしょう。

日本には中国に見られるような父系血縁制はもともとありません。中国から儒教が入ってきたとき、日本にはそれを受け入れる社会基盤（父系血縁制）はなかったため、長幼の序などを、人為的に主従関係や男尊女卑と置き換え、武士の藩主に対する忠誠、女性の男性に対する服従という形にして、封建社会の倫理的基礎にしました。儒教はその社会基盤のない日本では深い根を下ろすことはできませんでした。このため儒教は第二次大戦後簡単に衰退したのです。長い歴史のなかで培われた「固有の文化」(indigenous culture) は外来の文明より深い根をもっています。日本の母性的、あるいは母系的な固有の文化は外来の文明（儒教）より強かったのです。

増える離婚

アメリカでは離婚が増えていて、再婚、三婚も普通になっています。結婚披露宴で、両親の席に「生みの親」「育ての親」「現在の親」と双方で6、7人の親が集まることも珍しくはないと言います⁽¹²⁾。

その離婚の波が、家族を大事にした西部開拓時代の面影を残すこの地方都市のモDESTにも押し寄せていました。アメリカでは統計 (Statistical Abstract of the United States) によると、人口1000人当りの結婚数は9.8組、離婚は4.7組です (1990年)。これに対応する日本の数字はそれぞれ5.9組、1.3組です。アメリカでは毎年、新しく生まれるカップル数の半分に相当する離婚があり、その結婚生活は平均して7年です。これに対して日本では新しいカップルの誕生 (人口比) はアメリカの6割程度で、それだけに離婚率も小さく、アメリカの3割程度です。

今、アメリカの家族構成で最も多いのが「子供のいない家族」、次が「片親と子供」、第3位が「独身」、そして「両親と子供」は第4位に落ちています。残された子供が幼いときは、普段は母親と暮らし、休暇のときは父親と過ごすのが一般的ですが、肉親の愛情の薄い環境で育った子供たちは非行に走りやすいことが指摘されています。

1950年代のアメリカは第二次大戦の戦勝国として圧倒的な経済力を誇っていました。そのころのアメリカの専業主婦の理想像は、郊外の「白くて大きな家」に住み、朝早く玄関の前で夫をキスして送り、何人もの子供たちを大型車に詰めて学校まで届け、キッチンの床を磨き、洗濯機と乾燥機を動かし、キルティングなどの成人教室に通い、キャリアをもとうとする女性をあわれみ、自らは美しい女性らしい魅力をたたえる、という姿でした。こうした専業主婦の姿は、戦争の傷跡から立ち直りかけたばかりのヨーロッパや日本からは羨望の目で見られました。しかし、豊かさを達成したアメリカの専業主婦たちはなんとなく心の空しさを感じ、精神科医の門を叩きました。ちょうどこのころ、つまり1963年、ベティ・フリーダンは“*The Feminine Mystique*”という本を著して、この心の空しさは精神科医も経験したことのない「名もない病気」と名付け、女らしさという既成の概念にとらわれず、女性は自立し社会での成功を求めるべきだと説きました⁽¹³⁾。そしてフリーダンは1966年、NOW (National Organization for Women) という組織を設立し、これを契機にアメリカでのウーマン・リブの運動が高まりました。

アメリカの離婚率はその結果60年代の半ばから70年代の半ばにかけて倍増しました。ホーン川嶋瑤子はその著書『女たちが変えるアメリカ』で、「なぜあなたは結婚と離婚を繰り返すのですか。ファミリーはあなたにとって価値を失ったのですか」「いや、私たちはファミリーの価値を信じています。だからこそ、不幸な結婚をあきらめて、新しい理想的な結婚を求めるのです」との問答を載せています⁽¹⁴⁾。アメリカ人は夫婦のことばかり考えすぎ、自分たちの子供

のことを考えなさすぎるため、離婚するのです。

「白くて大きな家」から「離婚」へとアメリカの文化が変わった1960年代に、アメリカでは従来の価値観との断絶を強調するカウンター・カルチャーの高まりが見られました。ベトナム戦争や（その後の湾岸戦争）で極限状態を経験して帰還した人たちのなかには「外傷的症候群」を示して、社会に適応できなくなった者もいます。戦争に参加しなくても、明日の生存を信じられなくなった多くの若者は、リフトンの言う「不滅の象徴化」を心に抱くことがむずかしくなり、目先の快樂の追及に走りました。彼らはヒッピーと呼ばれ、放浪し、快樂を求め、労働を拒否しました。そして「経験的超越」に依存して、覚醒剤や麻薬で自己の実存を確かめようとしていました。そこで従来の価値観との断絶を調べるため、簡単に過去を振り返ります。

ナサニエル・ホーソンの『緋文字』は17世紀のボストンのピューリタン社会を描いています。若くて美しいヘスター・プリンは年配の医師の夫より先にイギリスからアメリカに渡り、不義の女の子パールを生む。ピューリタニズムの掟のきびしいボストンで、姦通（Adultery）を意味するAの緋文字を服の胸に縫いつけられ、監獄につながる。彼女はある日さらし台に立たされ、追及されるが、姦通の相手については口を割らない。遅れてボストンにきた夫はチリングアスと名前を変え、その相手を探し出し、報復の念に燃える。若くて高德の牧師ディムズデイルは苦惱で次第にやつれる。新総督選出の日、彼は衆人の前でプリンと姦通した罪を告白し、神と社会に真実を明らかにしたことを喜びながら、その場で倒れて息絶える、というストーリーです。この小説で当時のピューリタニズムの厳格な戒律がうかがえます。

ピューリタニズムは世俗内の禁欲と勤勉を倫理としていました。しかしその宗教観は人間不平等論です。全能の神は人を生まれる前から選民と永劫の罰を受ける人と分けているという考えですから基本的な人間不平等論です⁽¹⁵⁾。そこでピューリタンは自分は選民であるかどうかを知りたいという衝動的な不安に駆られ、禁欲を守り、その不安から逃れるため衝動的に働きました。禁欲と勤勉は富をつくりました。この富こそ選民の証拠とされたのです。このようにしてピューリタニズムはアメリカの資本主義を発達させる原動力になりました。そしていつの間にか富の獲得が禁欲と勤勉より優先するようになりました。しかしピューリタニズムはその人間不平等論のため、多くの抵抗を受けました。造物主は人を平等に造ったというアメリカ独立宣言の人間平等論は、18世紀のヨーロッパの啓蒙思想を教師とし、ピューリタニズムを反面教師として確立した思想です。

長い歴史のなかで培われた「固有の文化」は深い根をもっていると先に述べましたが、アメリカの固有の文化とはなんでしょうか。強いて言えば、1万年以上も前にアメリカ大陸に渡ってきたアメリカ先住民（アメリカ・インディアン）の文化でしょう。ピューリタニズムが強かったころ、先住民は永劫の罰を受ける悪魔の手先で、文化をもたないと考えられていましたが、最近では先住民の文化のもつ人間的な暖かみが再評価されています。しかしいわゆるアメリカ文化の主流はユダヤ・キリスト教倫理を共有する文化でしょう。「人種のるつぼ」の理想を掲げ、アメリカはひとつの融合された文化をつくらうとしていますが、それはまだ成熟しては

いません。それぞれの移民が持ち込んだ母国の固有の文化が自己主張しているのが現状です。このことはむしろアメリカをダイナミックに変化させています。

60年代のカウンター・カルチャーはアメリカに大きな影響を与えました。かつての禁欲の倫理は影がうすくなり、勤勉の徳もぐらついています。代わって快楽主義がひろがり、クレジット・カードが欲望を先取りするように「欲望の無限の高まり」が見られます。アメリカの離婚文化もこうした流れのなかで見るべきでしょう。

日本の離婚率はアメリカの4分の1くらいですが、日本もかつては離婚の盛んな時代がありました。江戸時代の統計はありませんが、明治中期の離婚率は人口1000人当たり4組前後で、今の3倍にも達しています。家風に合わない嫁は簡単に追い出すという「家の制度」のためと言われますが、そうではありません。儒教の倫理を基礎にした「家の制度」が強い影響力をもっていたのは、華族や士族などの上流階級で、家の体面上から離婚を避けようという気持ちが強く、「妻は二夫にまみえず」という良妻賢母教育もあって、「家の制度」はむしろ離婚に歯止めをかけていました。上流階級の離婚率は庶民の3分の1程度で、今の日本の離婚率とほぼ同じでした。上流階級の離婚を思いとどまらせるもうひとつの理由に妾の制度がありました。これは重婚ですが、形を変えた再婚でもありました。この妾制度は明治15年に施行された旧刑法で法的に否認され、明治31年に施行された戸籍法で戸籍面からも除去されました。しかし外来の文明は固有の文化より深い根はもっていません。儒教の倫理は一般庶民、特に大都市から遠く離れた北海道や東北地方、それに高知県などには及ばなかったのです。そこでは母性的な固有の文化が生きていて、女性はずらい労働もし、発言力もつよく、二夫にまみえずといった「終生結婚観」も持っていませんでした。離婚と結婚とを繰り返す女性も多く、高知県では「7度以上ノ離縁ハ許サズ」といった土佐藩の藩例が明治時代に入っても生きていました。日本の離婚率が下がったのは明治31年に民法が施行されて以降のことです。

固有の文化は根が深いものです。第二次大戦後日本の女性が強くなったと言われるのは、アメリカの影響というより、この母性的な日本の固有の文化のルネサンスと言うべきでしょう。

カウンター・カルチャーとしての同性愛

もうひとつのアメリカの問題は同性愛です。サンフランシスコ市内には、なんとなく雰囲気の変った一角がありました。カストロ通りです。ジョアンの説明では、そこは同性愛者、特にゲイたちの溜まり場で、全米からゲイたちがサンフランシスコに集まってきているそうです。3色の旗を窓からひらひらさせて、それを誇張しているところ、日本の鯉のぼりを掲げているところもありました。小さいピアスをして、一見してそれとわかる男たちも街を歩いていました。これがカウンター・カルチャーとしての同性愛です。

同性愛を追求した作品にエドモンド・ホワイトの自伝的小説『ある少年の物語』があります。ある少年の11歳から16歳ごろまでの同性愛の経験と、それに伴う葛藤を克明に描写し、同性愛

を抑圧した1950年代のアメリカ社会を浮き彫りにしています。当時、同性愛は脳の欠陥か不遇な家庭に原因がある忌むべき病と考えられ、陰花植物のように扱われていました。少年は同性愛を克服しようと仏教に凝ったり、男子寄宿学校で自分を鍛えなおそうとしますが、異性にはまったく興味を示さなくなります。精神分析医にかかるが、少年は、強すぎる母と弱すぎる父が同性愛をつくるという医学界の定説にも疑問を持ちます。「自分は男を愛し男から愛されたいだけで、同性愛者になりたいのではない」と、繰り返し主張します⁽¹⁶⁾。

同性愛を否定する道徳的根拠は聖書にあるとされてきました。旧約聖書では、「神は御自分にかたどって人を創造された。男と女に創造された」(創世記1)。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」(同)。神はアダムとイブという男女一人ずつを創造したので、そこに同性愛が入り込む余地はありません。神が造らなかった同性愛者は「良い」とはされてはきませんでした。また旧約聖書は性の倫理を述べ、死罪に値する行為として、姦淫、近親相姦、同性愛などをあげています(レビ記20)。この考えがきわめて長いあいだユダヤ・キリスト教徒を支配してきました。

シュテュルム・ウント・ドラングの60年代

離婚文化への変化が始まったのは1960年代です。同性愛に対する同性愛者自身の考えと社会の反応が変わり始めたのも60年代でした。この時代は、西ヨーロッパや日本が繁栄への道を取り始め、アメリカは輝くばかりの自信に満ちた「黄金の60年代」と言われました。しかしアメリカ人の価値観が大きく変わったのもこの時代で、これはアメリカのシュテュルム・ウント・ドラング(Sturm und Drang)の60年代と呼ぶに相応しいと思います。シュテュルム・ウント・ドラングはゲーテやシラーが活躍した18世紀後半のドイツのロマン主義的文学運動を指し、疾風怒涛と訳されています。

60年代は少数民族を始め、あらゆる部門からの権利賦与(entitlement)の要求が疾風のように高まった時代です。そして1963年には黒人の差別撤廃を目標にした、白人を含む10万人のワシントン大行進がありました。このような時代を象徴するのが、1961年に就任したケネディ大統領のニューフロンティア・スピリットの強調でした。

黒人を平等の立場に引き上げる一連の公民権法が初めて成立したのは1957年で、黒人の投票権を保護しました。60年の公民権法は黒人の選挙権登録をさらに強化し、ケネディ大統領によって提案された64年の公民権法は最も包括的なもので、ホテルやレストランなどでの差別禁止、学校や映画館など公共施設での差別に対して連邦政府が訴訟を起こせることにし、企業と組合には雇用と賃金の平等を要求しました。65年の法律は黒人の投票権をさらに強化し、68年の公民権法は家屋の売買賃貸についての差別を禁止しました。

60年代はまた少数派である若者のカウンター・カルチャーの高まりがありました。こういう風潮のなかで、同じように少数派である離婚希望者や離婚者の権利賦与の要求が高まりまし

た。これについてはすでに述べましたので、ここでは、やはり少数派である同性愛者について分析します。

その一般的な背景として、アメリカには昔から男っぽさを大事にする「マッチョ気質」があることを指摘しておきましょう。アメリカのヒーロー像は、俳優のジョン・ウェインが映画で見せたような、頑丈で、男らしく、女々しいところは少しもなく、忠誠を誓う者をかばうためには暴力も辞さない、といったタイプです。男が人前で涙を見せることは女々しいことだとされてきました。民主党の上院議員エドムンド・マスキーは1972年の大統領選挙のとき、メイン州で行われた予備選挙で、釈明のため記者会見に臨み、つい涙を流してしまいました。(日本であつたら公衆の面前で涙を流せば正直な男と見られるかもしれませんが)、アメリカではこの涙でマスキーは指導者として失格との烙印を押され、大統領選挙から脱落してしまいました。

60年代半ばからのウーマン・リブの運動の高まりにつれ、女性が社会に進出して活躍し、発言すること、あるいはボディービルをしたり、激しいスポーツをすることは、女性解放のため良いこととされました。かつては男だけの世界と考えられていたところに女性が足を踏み入れることは奨励されています。しかしこれとは逆に、男が「女の世界」に入ることは伝統的にタブーとされています。こういうマッチョの世界についていけないアメリカの男たちも少なくはありません。彼らはピーターパンのように、何時までも子供でいたいと思うようになります。これがピーターパン症候群で、このような男が同性に目を向ける傾向があります。彼らは優しい男性であり、多くの女たちが結婚したいと思うような男たちなのです。

マッチョ崇拜に対する反抗も見逃せません。両性具有という言葉があります。これは医学的に両性を持っているという意味ではなく、一人の人間のなかに男性的、あるいは父性的な要素と、女性的、あるいは母性的な要素を持っているという意味です。「毛沢東は女性の顔をした男だから偉大だ、と中国人はよく言っていました。英雄はしばしば男性、女性の両要素を持っています」とリフトンは語っています⁽¹⁷⁾。60年代のアメリカの男性のなかには、自分のなかにあるこの女性の要素を発見した者もいます。ベトナム戦争に参加した多くの若者は、戦争の実態を知ってからは戦争を憎悪するようになりました。「ジョン・ウェイン型のヒーロー像について『それが危険なのです。ぼくたちを戦争に引き入れたのもそれなんです』と、若者は語り始めました。戦争を非常に誇張された形で、狭く男らしさと結びつけていました。この点を疑い始めると、彼らは自己のなかにあるもっと柔軟な部分、情緒を感じとる側面、アメリカ社会では女には許されていて、男には恥ずべきこととされていた人前で涙を見せる、そういう側面を探し求めました」⁽¹⁸⁾。

このようなカウンター・カルチャーの流れのなかで、かつては自分たちを病的で異常だと考えていた同性愛者たち、特にゲイたちは自己主張を始めました。1960年代から70年代にかけて同性愛をおおっぴらに告白(カミング・アウト)する者が増えてきました。そして同性愛者どうしの結婚も法的に認めよと要求するようになりました。ベトナム戦争に参加した若者が戦争

を憎悪したように、もともとマッチョとは程遠い同性愛者は戦争に反対するようになりました。「女性差別主義、男らしき崇拜（マッチョ主義）、『男の遊びとしてのアメリカ式戦争』に対する闘いの名において、アメリカのホモセクシャルの運動は、ベトナム戦争に反対する闘いへ参加したのだった」⁽¹⁹⁾。このようにして同性愛者は政治にも影響を与えるようになりました。

スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセットは『大衆の反逆』で、「(フランスの政治家の) タレーランはナポレオンに向かって次のように言ったのだ。『陛下、銃剣をもってすれば何事もできますが、ただ一つ、できないことがあります。それは、銃剣の上に安坐することです』……国家とは、究極的には世論のあり方、つまり世論の均衡状態、世論の静態のことである」⁽²⁰⁾。この時代のアメリカはベトナム戦争をきっかけに、大衆の反逆による世論の新しい均衡への模索の時期であった、と言えます。

マッチョ気質に対するこのような抵抗も、強いアメリカを目指したレーガン大統領の出現で80年代にはかなり弱まり、時代は保守的になったことを指摘しておきましょう。

なお、同性愛を否定する道徳的根拠とされた聖書については、その解釈は開かれています。このことが何を意味するかを明確にするため、イスラム教と比較しましょう。主としてアラブに浸透して、イスラム教の主流派になっているスンニ派では、聖典であるコーランとハディース（ムハンマドの言行録）を自由に解釈することをイジュティハードといいます。それは宗教研究の権威者であるウラマーにだけ許されていて、この解釈から生まれたイスラム法は生活の隅々にまで浸透し、実に細かいことまで規定しています。しかし、人間の生活のあらゆる問題についての解釈は出尽くしたとして、9世紀の半ばに聖典の新たな解釈を禁止してしまいました。これをイジュティハードの門の閉鎖といいます。これはイスラム社会をまとめるのには役立ちましたが、1000年以上にわたって変化を拒否することになりました⁽²¹⁾。

これに対して、キリスト教の世界では聖書の解釈は開かれています。例えば、イエスの復活を文字通り肉体をもって蘇生するとの解釈もあれば、アメリカの神学者ポール・ティリッヒのように「蘇生と連続性が持つ象徴的な観念に深い意味がある」という解釈もあります⁽²²⁾。先ごろ来日した（96年10月）現代プロテスタント神学を代表するドイツの神学者ユルゲン・モルトマンは「たしかに、この四百年の西欧人は旧約聖書の言葉『地を従わせよ』に忠実でありすぎた。神は超越者で、地上は人間のものと考えがちであった。しかし、本来のキリスト教は、イスラム教の唯一神論と違って、三位一体の神です。『神は愛なり』の、交わりの神なのです。この大自然は、人間の所有物ではなく、ともに神に造られた家族です」と語り、一神教は自然支配という従来の見方に反論しました⁽²³⁾。また、「神がアダムとイブをつくった」として法王庁は従来進化論を認めませんでしたでしたが、教皇ヨハネ・パウロ二世は最近の書簡で「進化論は単なる仮説の域を越え、根拠があると認められる。しかし、われわれの精神は神からもらったものであり、人間の精神は進化論とは関係ない」と述べました⁽²⁴⁾。

アメリカは先進国のなかでは最も宗教色の濃い国です。神を信じる人は95パーセント、何ら

かの教会に属している人は50パーセントを超えます。しかし、聖書の解釈は開かれていて、一つの解釈で国中を統一することはありません。同性愛を否定する根拠を依然として聖書に求める人もいれば、そうでない人もいます。アメリカのキリスト教徒には保守的なファンダメンタリストもいれば、リベラルな宗派もあります。この多様性、柔軟性がアメリカをダイナミックにし、アメリカを発展させています。

クリスマスのミサ

モデストで1994年のクリスマス・ミサに出かけました。だれもが顔見知りで、「メリークリスマス」と挨拶しながら、教会のなかに入っていきます。男性のほとんどが背広姿で、なかにはTシャツの者もいました。女性も普通のスーツでした。

教会は一階建て、内部は白い壁に囲まれ、実に質素で教室のようでした。モルモン教はユダヤ教と同じように偶像禁止なので、何の飾り也没有。朝9時、ビショップのスコット・R・マクファーリンの司会でクリスマスのミサが始まりました。ビショップの地位を示す特別の儀礼服は着ていません。普段の背広姿であったのは意外でした。実はモルモン教は専門職業としての聖職者を認めていないので、礼拝の機会と責任はその任務を果たせるすべての男のメンバーに与えられているのです。そのスピーチはユーモアを交えた堅苦しくないものでした。

賛美歌に続いて、モルモン教でサクラメント (Sacrament) と呼ぶ聖餐が始まりました。人間の原罪を救うため身代わりになったイエス・キリストの肉体と血液を、聖別されたパンと葡萄酒で象徴的にいただくのが聖餐ですが、モルモン教のこの教会では聖別された食パンの一切れと銀の小さなカップに入れられた水でした。

モルモン教では、肉体は精神を入れる殿堂だから、健康のため、アルコール飲料、お茶とコーヒーを飲まないよう勧め、穀物と野菜や果物を多く摂取するよう教えています。

この教会には礼拝室に隣接して集会所兼体育館があります。この教会に属している人たちはよく日曜日にはここに来て、お祈りを済ませたあと、家族ぐるみの付き合いをし、子供たちは体育館でボールゲームなどをして遊びます。また婦人たちの集会がよくここで開かれるといえます。

アメリカ人の50パーセント以上が何らかの教会に属していますが、この教会のクリスマス・ミサから推測されるように、宗派は何であれ、アメリカ人はどこかの教会に属して連帯意識を持ちたいと願っているのです。

それというのも、アメリカは国土が広く、大都市以外は人々は離れて住み、しかも移民の国であって、宗教、思想、民族など多様だからです。アメリカ人の宗教は約90パーセントがキリスト教ですが、その中にはプロテスタントの諸宗派やカトリックがあり、さまざまです。このほかの有力な宗教としては、アメリカの政治、経済、文化に大きな影響を与えているユダヤ人の宗教、ユダヤ教が4パーセントほどあります。(スペインは地域によって民族も文化も異なる

り、スペイン人という共通の意識は薄い。例えば、1992年のバルセロナ・オリンピックはスペインではなく、カタロニアが開催したと地元は主張して、その他のスペイン人を怒らせた。しかし、カトリックがスペイン人の共通の気持ちをまとめている。このような多宗派社会のアメリカでは人びとは教会を中心に集まり、連帯感を持つとしようとするのです。

モルモン教には十分の一税 (tithing) があります。これは収入の1割を寄付する制度で、教会の財政を支え、生活に困っている教徒への福祉にも当てられます。また1か月に一食を断つよう勧められています。これで浮いた費用は、たとえわずかなお金でも、教会に寄付します。イスラム教では、イスラム暦9月のラマダン月には、日の出から日没まで断食します。断食というのは連帯意識を高める有力な手段なのです。

ボランティア活動

日本人の学生をホームステイさせるモデストや近隣の町でのボランティア活動についてはすでに触れました。日本でも阪神大震災をきっかけにボランティア活動が注目されるようになりました。そこで、この問題を少し掘り下げて見ましょう。

日本人の日本人論はジャポニズムであると大江健三郎はよく言います。「アメリカは日本人をこう見ている」などと、外国人の日本人論を紹介するだけで、本人の意見は背後に隠れてしまいます。これが本人の顔の見えない日本人による日本人論、言い換えれば外国人の日本人研究というジャポニズムです。

日本人は明確な信念の構造をもたずに自己形成するので、外国人は、日本人は曖昧で理解しにくいと言います。そこで日本人のアイデンティティはしばしばタマネギに喩えられます。日本人の信念を知る手掛かりになる核が中心にないからです。

このことをよく示す例が「会社型人間」です。これは、自己を会社に「投影」している人という意味です。

「投影」は精神分析学を創始したジグムント・フロイトの言葉です。フロイトは人の心には3つの部分があることを発見しました。本能的な欲望の泉である無意識のイド（本能的自我）と、善・悪、禁止・許可を無意識のうちに指令するスーパーエゴ（超自我）、それに、この2つの無意識にはさまれて調停役を果たすのが意識の部分であるエゴ（自我）です。このためエゴはしばしば「したい」という本能と「してはいけない」というスーパーエゴにはさまれて苦しみます。しかし、心のなかには、このエゴが傷つかないようにする心的装置である「防衛機制」(defense mechanism) があり、そのひとつの手段が「投影」(projection) です。「投影」は自己の観念や情緒を他者に投影して、それらは他者に属するものとして知覚する防衛機制です。会社に自己を投影する人は、自己の責任を会社の責任にすり替える、例えば、自分が悪いのを会社が悪いと思って、自我の苦しみから逃れているのです。

この「会社型人間」の没我的な努力が戦後の日本経済を発展させましたが、バブル崩壊後の

不況のなかで彼らは精神的に苦しんでいます。精力を使い果たし、解雇され、精神科医の治療を受けたサラリーマンの数は過去10年間で10倍に増えました⁽²⁵⁾。このような状況のなかで、日本人ももう少し明確な自己形成をしなければならないと気づき始めました。そのひとつの現れがボランティア活動なのです。しかし、相互依存の強い母性的な固有の文化をもつ日本の社会でどの程度自律精神が強まるかは、今後の問題でしょう。

アメリカでボランティア活動が盛んなのは、2つの理由があります。キリスト教の博愛精神と政府より先に人民があったという歴史です。

キリスト教に培われた欧米人は、日本人よりずっと明確な信念構造にもとづいて自己形成します。そのアイデンティティは中心に核をもつプラムに似ていると言われます。

欧米の会社は多くの人にとっては生活の糧を得るための労働の場であって、それ以上ではありません。そこで働く人たちの内面、つまりアイデンティティの核に当たる部分は教会に属します。ところが日本の会社はこの教会が担当している分野の一部を会社が担当していました。上司は部下の個人的な悩みなども聞き、仕事だけでなく、その精神面も管理しなければなりません。しかし、バブル崩壊後の会社は無慈悲にもこの部分を切り捨てています。そこに日本のサラリーマンの悩みがあります。

キリスト教にも宗派間のきびしい対立が時には見られます。例えば、1960年の大統領選挙のとき、プロテスタントの牧師代表数百人がワシントンに集まって、カトリックの候補には投票すべきではないとの声明を出したほどです。この選挙で選ばれたケネディはアメリカ史上初のカトリックの大統領でした。しかし、キリスト教徒の間、特に同じ宗派の間には連帯意識があり、これがアメリカのボランティア活動の精神的な基盤になっています。1996年のアトランタ・オリンピックが大勢のボランティアによって支えられました。このような自発的な働きかけは、労働奉仕だけには限りません。ハーバード大学などには名前も告げずに巨額の寄付をする卒業生もいるといます。実際に大学、病院、交響楽団などは善意の寄付なしには成り立たないほどです。

知人から聞いた話ですが、1981年の春、ボストン交響楽団創立100年を記念して、地元のテレビは「音楽マラソン」を24時間連続して放映しました。そのなかで指揮者の小沢征爾は「このオーケストラは寄付によって創立され、寄付によって支えられている」と、視聴者に善意の寄付を呼びかけていたそうです。

結びに代えて——核兵器についての日米の考えの違い

モデストの2回の滞在を通して、アメリカの文化を幅広く考えました。日米の文化の違い、特にキリスト教徒とそうでない人の心の深層にある信念構造の違いを感じながらも、対話を通じてお互いに相手の文化を尊重しながら、多くの点で「共通の価値」を見いだすことはできると思いました。

しかし、ただひとつのことで釈然としないものを感じました。それは、わたしがこの平和な街の人びとが原爆をどのように感じているのかを知りたくて、「わたしの兄は長崎の原爆で亡くなったの」と言うと、ジョアンから「それはお気の毒だけれど、あれは大勢の人命を救ったのよ」との返事が返ってきたときでした。その後、7—8人に原爆をどう思っているかを尋ねてみましたが、だれからも「戦争を終わらせるために原爆が使われた、と教科書で習った」という答えが返ってきました。私たち日本人の強い関心にくらべ、一般のアメリカ人は教科書以上の知識はもっていないようでしたし、また知ろうともしないようでした。ただ一人、広島を訪ね、原爆の悲惨さを話を聞いたり、写真で見たりして知った友人エド・サントウィーアだけが核兵器の恐ろしさを語っていました。このわずかな人たちと話した経験からも、わたしは日本が核兵器の実体を世界に向けて正しく知らせる必要を強く感じました。

モデストで聞かれた一般的な意見は、「日本本土上陸作戦によるアメリカ兵（および日本人）の膨大な犠牲を避けるためには、原爆投下は正しいことであった」というアメリカ政府の公式見解であり、アメリカ人の過半数の意見でもあることは事実です。ハリスの全米調査で70パーセントが戦争を早く終わらせ、アメリカ軍の人命を救うため原爆の使用は「正しかった」と答えています（1965年）。『ニューヨーク・タイムズ』がCBS ニュース、TBS テレビとの共同で行った世論調査では、「原爆投下は道徳的な罪」と答えたのは日本が84パーセント、アメリカが39パーセントでした（1991年11月）。これに対して、同志社大学の学生を対象とした意識調査では、アメリカ政府の公式見解を「強く支持する」はゼロ、「支持する」は5.7パーセント、「反対する」は25.4パーセント、「強く反対する」は43.5パーセントでした（1991年）。これを見ても、日米の意見の違いは明らかです⁽²⁶⁾。

このような政府の公式見解とは別に核兵器の問題を深く研究しているアメリカの学者もいます。例えば、先にあげた精神医学者のロバート・リフトンです。彼は1962年に広島に住んで多数の被爆者と面接し、それをもとに『死の内の生命』を著しました。

リフトンはヒロシマの被爆者が仏壇の前で死んだ縁者に話かけている姿に大いに感動しました。被爆者は、まるでそこに死者が生きているように感じ、実際に声を出して死んだ縁者と話していたのです。被爆者はこの対話で非常に慰められたといいます⁽²⁷⁾。これは、先に述べた「不滅の象徴化」の「生物的態様」です。心理的に言えば、被爆者は血のつながった者のなかに生きているのです。

当時の最も恐ろしい噂は「ヒロシマには永遠に草木も生えない」ということでした。しかし鉄道線路に雑草が生えているのを見つけたとき、被爆者は自然は生きていると、大いに感動し、励まされたといいます。翌春の桜の花はヒロシマ復活の象徴でした。そして被爆者はよく「国破れて山河あり」と口にしていました⁽²⁸⁾。これは、自然は空間的にも時間的にも無限に続くことを生きる支えとする「自然的態様」です。

この点で、わたしは夏目漱石がモットーとしていた「即天去私」を思い出しました。この「天」はキリスト教徒のキリスト、仏教徒の仏陀に相当しますが、それより、「自然」という方

が相応しいでしょう。それは人間と冷酷に対立する「自然」ではなく、人間と対話できる命をもった「自然」です。これは、人は死んで自然に帰るといふ、日本人の死生観にも見られます。古来の神道によれば、超自然的な神々は山や森や川から現れ、また山や森や川に帰り、そこで人の不滅の魂と結びつくといひます。

命をもった自然という考えは、わたしがヨセミテ国立公園へ行つたときにも感じました。この公園ではときどき山火事があります。しかしアメリカの国立公園では山火事を消すことも、焼け跡に植林することもしません。たくましい生命力によって、自然が蘇ることを期待しているのです。なお、州立公園では山火事を消すことはしますが、焼け跡に人為的な手を加えることはしません。

日本人は近代化の波に遅れまいとして、自然を征服することに夢中になりました。しかしヒロシマの被爆者が、鉄道線路の雑草を見て生きる意欲を奮い立たせたように、日本人の心の奥にある生きる意欲、言い換えれば「象徴化された不滅性」のなかで特に強いのは「命のある自然」ということでしょう。

被爆者が肉体だけでなく、精神的にも大きな衝撃を受けたことは言うまでもありません。そこで被爆者は宗教に救いを求めました。しかし既成の宗教は、こうした極限状態を体験した人たちに、破壊や創造という大きな力の前では人間は無力であるというあきらめの感覚を与えるのには役立ちましたが、生きる意味を与える点では恐ろしく不十分で、毎日聞かされる仏や神の言葉は急速にくだらないものになり、ついにはそれに立腹するようになりました⁽²⁹⁾。

アメリカは核兵器について日本とは違った見方をしています。1945年7月16日、最初の原爆実験に成功したとき、アメリカ人はそこに神の光を見て、ヨハネ黙示録に記述されている最後の審判 (Final Judgement) を連想しました。善悪の決戦場であるハルマゲドン (Armageddon) で、悪人を「第二の死」へ投げ込む核兵器の力を想像したのです。もちろんハルマゲドンは宗教の教えで、それがどんなに恐ろしくても、これと現実の核戦略とは区別しなければなりません。アメリカは何時でも悪人 (これは当時ソ連を意味しました) を滅ぼしようといふ、いわば神の立場を手に入れたと考えたのです。核兵器開発前の最大の爆弾は TNT 火薬で 20トンの破壊力でしたが、初期の原爆はその1000倍の破壊力、水爆は100万倍の破壊力があります。この点から見ても核兵器は通常の兵器とはまったく違ったものです。

アメリカはこのため、神にも似た核兵器を崇拜しました。リフトンはこれをニュークリアリズム (核兵器崇拜主義) と呼びました。これは核兵器に対する情熱的な抱擁という、一種の宗教に近い考えです⁽³⁰⁾。

このニュークリアリズムは各方面に大きな歪みを与えました。日本に原爆を投下したのは日本人が有色人種だからだ、とアジア、特にインドで強く信じられました⁽³¹⁾。また核実験がアメリカとフランスは南太平洋で、ソ連は中央アジアという非白人地域で行われたことは、核兵器が白人による非白人の絶滅というイメージを非白人に与えており、人種差別のイメージと結びつきました⁽³²⁾。

またアメリカ社会にも悪影響を及ぼしたことを忘れてはいけません。1949年はアメリカにとって共産主義の脅威をひしひしと感じた年でした。アメリカが戦時中支援を続けてきた中国に共産政権が生まれ、ソ連も原爆実験に成功したからです。特に後者はアメリカにヒステリックな政治的反響を及ぼしました。黙示録的な最後の審判のイメージをもつ核兵器を独占していた時代には、アメリカはいわば神の立場に立てたと信じていましたが、こんどはソ連からの死の脅威、さらに世界の破滅という危険にさらされたと感じたのです。核の秘密がスパイによってソ連に漏れたとの疑惑が急に高まりました。共和党上院議員のジョセフ・マッカーシーが1950年2月、「最も重要な国務省に共産主義者がはびこっている。わたしはその205人のリストを持っている」と演説したのがきっかけで、赤狩りのマッカーシー旋風が全米に吹き荒れました。「全面的な危険を具有している核の秘密は、同じように全面的な政治的反応を呼び覚ます。原爆の秘密が1950年代のアメリカのマッカーシー派による迫害のための道を舗装した、とわれわれは言うことができる」⁽³³⁾。マッカーシー旋風は多くの有能な人々を犠牲にしました。例えば、チャールズ・チャップリンは戦争や政治を風刺した映画「殺人狂時代」(1947年)でアメリカの右翼を刺激し、「ライムライト」(1952年)を完成したあと、赤狩りの舞台である非米活動調査委員会での証言を要求されました。しかしチャップリンは証言を拒否してヨーロッパに渡り、スイスに住まいました。

1990年代になって、米ソ、米ロの間で戦略兵器削減条約 (START 1, 2) で核兵器の削減が合意されましたが、ロシアとアメリカはまだ人類を滅ぼすに十分な核兵器を持っています。またロシアの核物質の管理がずさんで、核兵器がテロリストの手に渡る危険もあります。理由は何であれ核兵器を使わない、さらに核兵器のない世界をつくることは、この小論の序論で書いたような「人類共通の資源」になるでしょう。それは人類を絶滅させ得るという核兵器のもつイメージをなくし、核兵器開発に注ぐ努力をほかに振り向けるという意味で資源なのです。

アメリカのダイナミズムについてはこれまで折りに触れて述べてきましたが、アメリカは日本に対する原爆投下については恐ろしいほどのサイキック・ナミング (精神的無感覚症) に陥っています。それは、原爆投下50周年を記念して、スミソニアン航空宇宙博物館で1995年5月に開催する予定であった原爆展を中止せざるを得なかったことにも見られました。

この原爆展で予定していた広島、長崎の被爆資料の展示や内容説明の記述が「日本を戦争の被害者に仕立て、原爆投下の正当性に疑問を投げかける修正史観に染まっている」と軍人団体や議会、マスメディアからすさまじい抗議が出ました。そこで博物館側は被爆資料の展示を制限し、説明を書き直しました。これに対して歴史学者グループは「博物館は政治的圧力に屈服し、歴史を歪曲しようとしている」と批判しました。このような論争のなかで、マーティン・ハーウッド館長は開催予定の直前に辞任に追い込まれました。原爆展開催を中止したあとの5月19日、スミソニアン協会のマイケル・ヘイマン事務局長らは上院議事運営委員会の公聴会で、当初計画の非を認め、謝罪しました。(このあと、修復された原爆投下機エノラ・ゲイを中心

に、当初の狙いとは違った、原爆投下を正当化する原爆展が6月28日からスミソニアン航空宇宙博物館で開かれました。

こうした論争について、リフтонは朝日新聞記者とのインタビューに応じて、次のように語りました⁽³⁴⁾。

「(国内の反応は) 予想通りであった。米国ではヒロシマについての情報は長い間押さえつけられ、真実の姿、とりわけ『人間的な真実』を明らかにすることに抵抗があった。原爆投下を正当化する官製説明、解釈にこだわってきた。ショックだったのは、博物館側がこれら軍人や議員の声を聞き入れて、展示内容を検閲させたことだ」

「今回の原爆展は全世界の関心事であるはずだ。われわれは、広島の人々の経験と彼らの声を詳しく聞かねばならない。彼らが第一の目撃者なのだ。彼らこそ、被害者なのだ」

「(今回の原爆展の) 最初の案は『全部開けよう、みんな見せよう』とヒロシマの真実を示そうとした、要するにナショナリズムを超えたビジョンだった。それがカンにさわったのだ」

「ヒロシマについてあまり聞きたくない、という精神的無感覚症にかかってきた点は、(戦後50年間) ほとんど変わっていない。……米国人に出来るだけ多くのヒロシマの証拠と資料が直接示され、それが米国人に心理的、精神的に出来る限り届くようにすることが非常に重要だと思う」。

このようにアメリカは核兵器や核戦略についての思想をほとんど変えてはいません。友人エド・サントウィーアは広島を訪れ、原爆の実態を知りました。彼はアメリカではどこにでもいる普通の人です。少しでも多くの人々が原爆展で核兵器の実態を見て、人道的な立場からものを考えるようにすべきでした。それが出来なかったことは残念です。核兵器のない世界という「人類共通の資源」をつくる第一歩はアメリカ自身がこのサイキック・ナミングに気付くことでしょう。

(本学専任講師＝英語担当)

引用・参考文献

- (1) トーマス・クーン, 中山茂訳『科学革命の構造』 みすず書房
- (2) 慶応国際シンポジウム『地球社会への展望』 日本生産性本部 p. 422
- (3) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』 岩波書店
- (4) Robert J. Lifton “Death in Life” Touchstone Books, New York
梶井勉夫ほか訳『死の内の生』 朝日新聞社
- (5) Robert J. Lifton “Thought Reform and Psychology of Totalism: A Study of ‘Brainwashing’ in China” University of North Carolina Press
小野泰博訳『思想改造の心理・中国における洗脳の研究』 誠信書房
- (6) Robert J. Lifton “Home from the War: Vietnam Veterans”
Simon & Schuster, New York
- (7) Robert J. Lifton “The Broken Connection” Basic Books, New York
- (8) 朝日新聞 1996年7月22日付け
- (9) Carl Jung “Modern Man in Search of His Soul” pp. 129-130
Harcourt Brace & Co. New York
- (10) リフトン他『日本人の死生観』 岩波書店, Lifton “The Broken Connection” pp. 13-35
- (11) 中根千枝「東洋における基層文化の性格」 講座『東洋思想』 9 東大出版会
- (12) 松山幸雄『ピフテキと茶碗蒸し』 暮らしの手帖社
- (13) Betty Friedan “The Feminine Mystique” W. W Norton & Co. Inc. New York
- (14) ホーン川嶋瑤子『女たちが変えるアメリカ』 岩波書店
- (15) エーリッヒ・フロム, 日高六郎訳『自由からの逃走』 東京創元社
- (16) 高田賢一他『たのしく読めるアメリカ文学』 ミネルヴァ書房
- (17) (18) 朝日ジャーナル「リフトン・河合隼雄対談」 1980年5月2日号
- (19) ギー・オッカングム, 関修訳『ホモセクシャルな欲望』 学陽書房
- (20) ホセ・オルテガ・イ・ガセット, 桑名一博訳『大衆の反逆』 白水社
- (21) 井筒俊彦『イスラーム文化』 岩波書店
- (22) 朝日ジャーナル「リフトン・河合隼雄対談」 1980年5月2日号
- (23) 朝日新聞夕刊 1996年10月15日付け
- (24) 朝日新聞 1996年10月25日付け
- (25) 雑誌『TIME』 “The Failed Miracle” 1996年4月22日号
- (26) 上智大学アメリカ・カナダ研究所編『アメリカと日本』 彩流社
- (27)~(33) はいずれも Robert. J. Lifton “The Broken Connection” からの引用, 以下ページ数だけを示す。(27) pp. 18-19 (28) pp. 22-23 (29) p. 339 (30) p. 369 (31) p. 360 (32) pp. 359-360 (33) p. 357
- (34) 朝日新聞 1995年1月23日付け